

奥田靖雄構文理論の継承と発展

志波彩子, 早津恵美子, 茶谷恭代, 前田直子

本ワークショップは、奥田靖雄が残した構文理論、特に文の構造と要素の関係、及び構造的なタイプのパラディグマティックな体系という考え方について、これを今日の日本語学及び言語学の中で捉え直すことで、発展的に継承することを目的とし、そのための議論を提供するものである。奥田の構文理論の中で着目したい最も重要な点は次の2点である；①単語によって構成された文は繰り返される使用により、抽象化され、一般化されたパターンとなる。このパターン化した構造は要素から独立して実在するが、その独立性は相対的であり、構造と要素はつねに相互に影響し合いながら全体としての統合的体系（シンタグマティックな体系）を作り上げている。そして、構造の要素として重要なのがカテゴリカルな意味である。②それぞれの構文は孤立して存在するわけではなく、他の構文と移行し合い関わり合いながらパラディグマティックな体系（ネットワーク）を成している。このパラディグマティックな体系の中で、ある構造的なタイプが別のタイプに移行する際の重要な条件となるのが単語のカテゴリカルな意味である。

発表では、まず早津が「カテゴリカルな意味の本質と射程」という題目で、カテゴリカルな意味について議論する。単語が文の中で示す文法的な性質は、その単語の語彙的な意味の総体ではなくある側面の意味に支えられている。たとえば「折る」「大学」という単語が、それぞれひとつの語彙的な意味において、「千代紙を鶴に折る：千代紙で鶴を折る」、「大学に勤める：大学が燃える：大学で花火をする」という異なる構文をとりうるのはそれ故である。単語のこうした文法的な性質の土台となっているのが、カテゴリカルな意味である。カテゴリカルな意味は、単語の語彙的な意味が明らかでも、それだけで一義的に決まるわけではない。「折る」「大学」はソーラス的な分類としては、状態変化動詞、組織名詞であろうが、これはあくまで語彙的な意味の観点からのカテゴリー（範疇）であって静的なものである。それに対してカテゴリカルな意味は、単語の文中での文法的（構文論的、形態論的）なふるまいの中で発揮されるため、どういった構造に参画するかによって、単語の語彙的な意味のどの側面が発揮されるかは異なってくる。このように、カテゴリカルな意味は、動的であり、かつ文法に関わるという点で形式的でもある。本発表では、文法の研究および教育における「カテゴリカルな意味」の有効性を確認し、その射程がどこまで広げられるかを考えてみる。

次に茶谷が「動詞「つかむ」の多義の記述」と題して、「つかむ」の多義が他動性構文のパラディグマティックな体系の中でどのような拡がりを持つかを、カテゴリカルな意味を取り出しながら記述する。「つかむ」は、ヲ格の具体物名詞とむすびつく（接触）の構造（「相手の肩をつかむ」）の中で動作動詞としてはたらき、／指をまげて物を手の中におさめる／という意味を表す。ヲ格の名詞が抽象名詞、特に社会的にプラスの価値のある状態・性質を表す抽象名詞になると抽象的な（所有）の構造（「レギュラーの座をつかむ」）、さらに抽象名詞のカテゴリカルな意味を取り出すことによって、心理的なかわりにおける〈知覚認識〉～〈知的認識〉の構造（「感覚をつかむ」～「主旨をつかむ」）の中で、意味の拡がりを見とめることができる。こうした意味の拡張は「経済学をつかむ」などの臨時的で新しい使用により、現在も続いている。ヲ格名詞のカテゴリカルな意味を含む構造という形式に条件づけられたものとして「つかむ」の語彙的な意味を記述することにより、別義とまではいえないような意味のずれや側面の違いにも触れながら多義の全体像をとらえ、「にぎる」等の類義語との多義のあり方の違いを明らかにすることができることを見ていく。

最後に志波が、「奥田靖雄のヲ格連語論」と題して、奥田のヲ格連語論を土台として他動性構文論を構築することを目指し、この中の心理的関わり構文（心理動詞の構文）について、構文間のパラディグマティックな体系を考察する。心理的関わり構文は大きく認識構文と態度構文に分けられ、それぞれが感性・感情評価、知的活動、言語活動の3つの下位タイプを持つ。この中で、例えば「見る」という動詞は知覚動詞として具体名詞・現象名詞と組み合わせる構造で〈知覚認識〉の意味を表すが、抽象名詞と組み合わせる構造では「考慮する」に近い〈知的認識〉の意味を表す（結婚相手の家柄を見る）。また、「状況を軽く見る」のように感情評価形容詞と組み合わせると感情評価的態度構文となる。さらに、「尊敬する、恐れる」といった動詞は、感情評価的態度構文を構成する感情評価的態度動詞であるが、一方で、[N-ヲN-ト知的態度動詞（「彼を敵と見なす」等）]という知的態度の構造の要素となって（「彼を師と尊敬する」）、知的な判断を含んだ感情評価を表す。こうした文は、「尊敬する、恐れる」といった動詞の結合価によって組み立てられたとは考えにくく、既存の知的態度の構造の要素となることで実現したと考えられる。以上のことは、知覚認識構文と知的認識構文、感情評価的態度構文と知的態度構文が体系上近接しながら相互に関わりあっていることを示している。